山下将軍の死

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
山下将軍の死

【Ｎコード】
Ｎ１４０７Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
山下奉文は武勲を挙げたら故に処刑されることとなった。その彼が最期に見せたものとは。理不尽な死の中に見せる何かを書いた作品です。

第一章

山下将軍の死

歴史とは時として非常に無慈悲なものである。
名声を得た人物が最後には汚名を被り死ぬ場合もある。英雄が罪人として処刑される場合もままある。
それはこの人山下奉文も同じだ。彼はマレーの虎と恐れられた猛将であった。
頭は丸坊主にしており顔は厳しい。そのうえ巨体で体重もかなりのものであった。だがその頭脳は明晰であり統率にも秀でまさに将たるに相応しい人物であった。
この時代の帝国陸軍には如何せん適材適所ということには甚だ欠けていたが彼を前線指揮官にしたのは正解であった。彼はマレーで活躍し瞬く間にシンガポールを陥落させた。
この時に敵将であるイギリス陸軍中将パーシバルにイエスかノーかと迫ったのは有名な話である。これも相手を侮辱したのではなく一気に結論だけを迫ってのことだ。
しかし歴史にある通り日本は戦争に敗れた。戦局の劣勢はどうしようもなく彼も降伏と共に投降することになった。彼が降伏すると聞いた時に連合軍の司令官であるマッカーサーは一つ面白いことを考えついたのだった。そしてすぐにそれを幕僚達に話した。
「彼に来てもらおう」
「彼といいますと？」
「あの彼だ」
サングラスの中に面白そうな目の色を隠しての言葉だった。
「彼に来てもらおう」
「ですが閣下」
「あの方は今日本におられますが」
幕僚達はマッカーサーのその言葉に対して怪訝な顔で返した。

「それでもですか？」
「フィリピンにまで」
「そうだ。来てもらう」
彼はそれでもだというのだった。
「わかったな。すぐにだ」
「はあ。それでしたら」
「わかりました」
彼等もマッカーサーの考えがわからないまま頷いた。そうしてその言葉通りに今その人物をわざわざ日本からフィリピンまで呼び寄せたのであった。
その降伏の場であった。降伏にも調印が必要だ。そしてそれをするのもまた指揮官の責任である。彼はその責を果たす為に今山を降りその場に現われた。
「かつてはわしが降伏を迫ったが」
「惨いものですね」
「これも天命か」
その調印の場に行く時の言葉であった。部下達とこの話をしていた。
「そのわしが降伏するとはな」
「では閣下、ここは」
「我々が代わりに」
「いや、いい」
だがそれはいいというのだった。
「わしが指揮官だ。ならばわしが調印する」
「左様ですか」
「それが務めだ」
あらためて言うのであった。
「だからだ。行こう」
「はい、それでは」
「参りましょう」

彼等はこんな話をしながら降伏の場に赴いた。するとそこにいたのは。山下が知っている彼だった。痩せたその顔を見て愕然とした。
「パーシバル閣下、この男ですね」
「この男が山下奉文ですね」
「そうだ」
その彼、パーシバル中将は静かにアメリカ軍の軍服の男達の言葉に頷いた。
「この男だ」
「貴方に屈辱を負わせたこの男が今降伏する」
「無様なものですな」
彼等は山下をあからさまに侮蔑した目で見ながら話をしていた。アメリカ軍の者達はそうであった。
「では閣下、今からこの男が貴方に膝を屈します」
「それをよく御覧下さい」
「わかった」
パーシバルはここではあえて殆ど何も言わず見ているだけであった。しかし山下の周りはそうはいかなかった。明らかに狼狽を見せていた。
「これがこの連中のやり方か」
「何ということを」
敗れたとはいえ誇りを失ってはいなかった。このあまりにも屈辱的な行いに対して彼等も憤る。しかしどうしようもなかった。
「閣下、やはりここは」
「我等が」
「いや、いい」
山下とて屈辱を感じていない筈はなかった。現にその唇を強く噛み締めている。しかしそれでもだった。彼はあえて前に出たのであった。

第二章

「調印する。いいな」
「は、はい」
「わかりました」
彼は無念を押し殺して今調印した。これで終わりかと思われたがそうではなかった。何と彼はすぐにその身柄を拘束され裁判にかけられることになったのだ。
「馬鹿な、裁判だと！？」
「閣下が何をされたのだ！」
部下の多くも裁判にかけられることになった。しかし彼等は自らのことは置いておいて何故山下が裁判にかけられるのかと抗議するのだった。
「理由を言え！」
「何故だ！」
「御前達は敗れた」
連合軍の将校の一人が冷然と言い放った。
「だからだ。こうして裁かれるのだ」
「敗れたからだというのか」
「その通りだ。理由は何とでも言える」
その裁判の性質を何よりもはっきりと言った言葉だった。
「わかったらさっさと死ね。いいな」
「うう、閣下が何故だ」
「何故閣下が死ななければならない」
日本軍にとっては誰もが納得のいかないことであった。こう呻きざるを得なかった。
「確かに敵将パーシバルは捕らえた」
「だが将官として扱った」
このことには絶対の自信があった。事実だからだ。

「誰が裁判にかけたというのだ？」
「それに閣下が何か罪を犯されたというのか」
確かに理由は多く挙げられていた。しかしその全てがどう見てもただのこじづけであった。彼等の誰が見てもそうでしかないものだった。
しかし彼は処刑される。これはもう決まっていることだった。このことに誰もが抗議の声を挙げざるを得なかった。山下の下にいたならば。
「この世に正義はないのか」
「これが天命だというのか」
「そうなのだろうな」
ここで彼等のその嘆きの言葉に頷いた者がいた。
「これがな。そうなのだろうな」
頷いたのは他でもなかった。その山下本人であった。
彼は言った。全てを達観したような落ち着いた声で。
「つまりはわしの首が欲しいのだ」
「では最早戦は終わりました」
「それで何故」
「勝った者は何とでも言える」
山下はそうするつもりはなかった。しかし彼等はそうではなかった、それだけなのだ。
「何とでもな」
「では閣下はこのまま」
「受けられるというのですか」
「この首一つで決まるのならそれでいい」
やはり全てを達観した言葉であった。
「それでな」
「ですが閣下」
「その処刑ですが」
部下達は無念に満ちた声でまた彼に言うのだった。監獄の中で僅

かに許されたその会える時間の中で。今にも男泣きしそうな声で言うのだった。
「自害ならともかく」
「銃殺ですらなく」
軍人への処刑は銃殺とされていたのである。そして帝国陸軍の軍人ならば自害、即ち切腹が軍人に相応しいと考えられていた。そういったものは全て無視されたのだ。
「絞首刑です」
「これではあまりにも」
「いいのだ」
しかし山下はこう言うのだった。
「もういい。それはな」
「これではリンチです」
「これが奴等のやり方なのですか？」
「奴等の正義だと」
「そうなのだろうな」
山下の言葉は彼等の血を吐くような言葉を耳にしても変わらなかった。
「それが連合軍の正義なのだ」
「大将ともあろう方をリンチにするとは」
「しかもです、閣下はです」
「そうです」
彼等の言葉は続く。言葉には血と涙が入っていた。
「正々堂々と戦われた。それだけです」
「それでこのようなことを」
「だからよいのだ」
やはり山下の言葉は変わらない。

第三章

「よいのだ。わしはよいのだ」
「では閣下は」
「これを受け入れられるのですね」
「それが運命ならばな」
受け入れる、まさに全てを受け入れた言葉であった。
「そうしよう、わしは」
「閣下・・・・・・」
「お見事です・・・・・・」
部下達は山下のその言葉の前に泣き崩れた。そうした一幕があった。そしてその処刑の日がやって来た。昭和二十一年二月二十三日であった。
この処刑の前に一人の僧侶が彼の元を訪れた。穏やかな顔をしたその僧侶が山下の前にやって来てまずは一礼したのであった。
山下は法衣を着たその僧侶を見て。まずは己の名を名乗った。
「山下奉文です」
「はじめまして、閣下」
僧侶は彼をまずはこの尊称で呼んだ。
「拙僧は浄土宗の教戒師の森田正覚といいます」
「森田先生ですね」
「はい、そう呼んで下されば結構なことです」
穏やかな笑みで彼に答えるのだった。
「閣下、間も無くですが」
「はい」
山下もまた静かな面持ちで彼の言葉を受けた。
「この世が終わろうともまた生まれ変わります」
「それは聞いています」
仏教独自の輪廻転生の思想だ。彼もそれを知らないわけではなか

った。
「ですから罪を犯したとしてもです」
「いや、先生」
しかしここで山下は。右手を前に出してその言葉を制止したのであった。
「それはいいです」
「いいとは？」
「私のことよりも私の下で死んでいった部下達の為にお祈り下さい」
こう言うのであった。
「私もこれでもあの者達を弔ってきていました」
「その方々の為にですか」
「私は戦いました」
それは認めるのだった。
「ですが神仏に許しを乞うようなことはしたでしょうか」
「それはですね」
森田もここで周囲を見回した。連合軍の目を気にしてだ。しかし幸いにして今いる憲兵達は日本語がわからないようで厳しい顔はしていても何も言わなかった。
「私もまた。ないと思っています」
「日本もですね」
「そうです」
森田はこのことも認めるのだった。
「我が国は戦っただけです。それだけです」
「戦うことが罪ならばどの国も罪を犯していますね」
「その通りです」
彼等の考えはここでは一致していた。そうしてそのうえでさらに話をしていくのだった。
「日本だけではありません。それは」
「しかし日本は裁かれる」
今現在それが進んでいる最中だった。そしてそれは山下自身もそ

の中にいた。現に彼は今まさに処刑されようとしているのがその証拠である。
「全ては負けたからです」
「これは正義ではありません」
森田もまたこう確信していたのだ。
「悪です。それは存じているつもりです」
「それもまたやがて明らかになるでしょう」
山下はこのことも静かに述べた。
「ですが今は」
「閣下のことはいいのですね」
「はい」
やはり穏やかに頷く山下だった。
「潔く。軍人として」
「そうですか。わかりました」
森田は彼の言葉を受けて頷いた。そうしてそのうえで最後まで彼に付き添うことになった。話が終わってすぐにアメリカ軍の兵士達が来て彼の両手と左右の腿をベルトで縛った。それからジープに乗せる。それはまるで精肉を扱うかのようであった。
森田はそうした山下の扱いを見て。無念の顔で彼の横で呟いた。彼もまたジープに乗せてもらいそのうえで処刑の場まで同行していたのである。
「潔く戦った方に何ということを」
「言って下されるな」
山下はこの時も穏やかなままであった。

第四章

「もうそれは」
「申し訳ありません」
「それよりもです」
彼はその闇夜の中で森田に言ってきた。
「腰折れで恥ずかしいですが」
「はい」
「これを御聞き下さい」
こう断ってから。彼は詠った。

満ちて欠け　晴れて曇りに　変われども　永久に冴え澄む　大空の月」

これが彼の歌だった。山下はこの歌を詠い終えると森田に顔を向けて微笑んでみせた。
「これが辞世の歌です」
「わかりました。それでは」
森田はこの歌を覚えることにした。忘れることはできなかった。そうしてそのうえで処刑場に連れて来られた。そこに辿り着くとすぐにジープから降ろされた。
「降りろ」
英語で告げられる。山下は縛られたまま降ろされる。それから森田の肩につかまってそのうえで絞首台の階段に登っていく。その側にはマンゴーの大木が聳え立ち枝葉が処刑台を屋根の様に覆っている。夜空には星達がある。そして月もだ。
しかしであった。そこには美しさはなかった。そうさせているのは処刑場のライトが下品に場所を照らしそれを隔てさせている金網にしがみついて見てきている大勢のアメリカ軍の兵士達だった。彼

等はガムを噛みながらこう山下に対して罵声を浴びせていた。
「さあ、とっとと死ね！」
「地獄に落ちろ！」
「くたばれデブ！」
「何と醜い」
そんな彼等を見た森田は顔を顰めるしかなかった。
「武人に対して何ということを」
「いや、構いません」
しかし当の山下はここでも落ち着いたものであった。
「私のことは既に部下達が知っていてくれています」
「だからですか」
「それに日本人はわかってくれます」
語る言葉には疑いはなかった。あくまで信じている者の言葉であった。
「必ず」
「だからこそですね」
「はい。私のことは後世の日本人がわかってくれます」
処刑台においても彼は日本人のことを、そして日本のことを見ていたのだった。己を見ることは決して見ようとはしないのだった。
「ですから」
「閣下・・・・・・」
「そして貴方も」
次に森田の顔を見て微笑んでみせてきた。
「最期まで見ていて下さい」
「その為にここにいます」
森田は今まさに涙を流しそうだった。しかしそれでも何とか堪えていた。そうしてそのうえで山下の言葉を聞くのであった。
「ここに」
「それでは」
山下の首に縄がかけられる。ここで執行官が強く引いたので山下

は言った。
「痛いな」
「痛いだと？」
だが執行官はそれを聞いてせせら笑うように返してきた。

第五章

「幾ら死ぬ身でもここまで酷くされるとはな」
「これから死ぬのに何を言っているのだ」
「全くだ」
だが執行官達はそんな彼をせせら笑うばかりであった。
「罪人の分際でな」
「さっさと地獄に落ちろ」
「いえ、私からも御願いします」
見かねた森田がその執行官達に対して言ってきた。
「ここは」
「ふん、まあいいだろう」
「わかった」
執行官達は不満ながら彼の言葉を受けて縄を緩めた。山下はそれを受けて遂に森田に対して最期の別れを告げるのだった。
「ではよく御覧になっておいて下さい」
「はい」
「人間だから粗相をするかも知れません」
そしてこのことも断った。彼はそうは言ってもそれでも誇りは失ってはいなかった。
「ですがそれを修飾して言わなくてもいいです」
「いいのですか？」
「ありのまま伝えて下さい」
こう森田に言うのであった。
「後のことは後世の日本人達に任せます」
「子孫達がですか」
「そうです。彼等に任せます」
そういうことなのだった。彼の考えは。
「私は私のままで全てを任せて旅立ちます」

「わかりました」
「そして」
山下は一呼吸置いてから。またしても森田に告げてきた。
「これも腰折れですが」
「はい」
「聞いて下さい」
「わかりました」
森田が応えて頷いたのを見てそれから詠いはじめた。その歌は。

待てしばし　勲残して　逝きし戦友　後な慕いて　我も行きなん

こう詠ってからまた森田に問うた。
「北はどちらですか」
「あちらです」
森田がある方向を指差すとそちらに身体を向けて一礼した。そして言うのだった。
「皇室のいやさかを祈り、日本の復興の早からんことを祈ります」
これが彼の最後の言葉になった。森田はその言葉が終わってから弔いの読経に入った。しかし執行官達はそれを聞いても苛立たしげな様子を見せるだけであった。
「何をしている！？」
「それは何だ！？」
「仏教の臨終の儀式です」
彼はこう彼等に告げた。
「ですからお待ち下さい」
「ふん、勝手にしろ」
「どのみちもうすぐくたばるのだからな」
読経が終わった。森田は自分の両手で山下の縛られている両手を握り締めそのうえで。彼に言葉をかけた。
「では将軍」

山下は静かな顔でそれを聞いているだけであった。
「心おきなく旅立って下さい」
彼は微笑んでそれに頷いた。そうしてそのうえで別れとした。
執行官達は二人の間に入りその手を払いのけた。それから森田を後ろに追いやってせわしく縄を切った。これで全てが終わった。森田はここに至って遂に涙を流した。その涙はとめどめなく流れ出て頬を濡らした。彼はそれを拭うことをせず流れるに任せていた。
山下奉文の最期はこのようなものであった。森田は彼の言葉通りありのまま伝えた。それは実に見事なものであった。そして。
彼の言葉通り皇室は穏やかなままである。陛下は今日も御自身の執務を為されている。日本の復興は早かった。今我々は幸せにその生活に励み繁栄と平和を謳歌している。
しかし山下の死は忘れてはならない。戦争が終わりその際罪なくして処刑された者がいたということを。潔く刑に服しその時にまで我が国のことを思い続けていたことを。決して忘れてはならない。そう強く思い今ここにその死のことを書き留めておくことにする。

山下将軍の死　　完

２００９・６・２３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1407i/

山下将軍の死

2010年10月8日15時04分発行